

勇気のコーヒー

富山県滑川市 今西 梓 (26)

三月二十日、私は单身、地中海に浮かぶ孤島であるマルタ島に降り立った。卒業を間近に控えた大学院生だった私は、ずっと夢だった海外一人旅を憧れの地で叶えた。

私は元来、人見知りで勇気がない自分に辟易していた。何かを変えたい——心のどこかでそう思ったのかもしれない。元々旅行が好きだった私は、どこか突発的にマルタへの往復航空券を購入した。「予約完了」をクリックする勇気を何度も何度も振り絞って。三月十八日のことである。

まともに海外旅行もしたことがない私は、一日で思いつく限りの準備をし、飛び立った。パスポートに描かれた菊の紋章を見たマルタの入国審査官が、ニコツと笑って「コンニチハ」と言ってくれた時、心からホッとしたのを今でも忘れないう。空港を出たもののバスの乗り方やホテルへの行き方がわからない。誰かに聞けばいいのだが、異国の地に来て未だ殻が脱げない自分がかっかりし、その日はホテルで反省した。

翌日、私は目標をたてた。今日だけで五人以上の人と会話すること。私には少し厳しい目標かな、と消極的に考えつつ首都バレッタへ向かった。途中からバスに乗り込んできた黒人が隣の席に座り、話しかけてきた。どこから来たのか、マルタは初めてか。他愛のない会話をするうちにバレッタに着き、仲間を紹介すると言って屋台のようなカフェに連れて行ってくれた。そこには彼の仲間たちが数人集まって話をしており、私を歓迎してくれた。コーヒーにミルクは入れるか。訛りが強い英語で彼にそう聞かれ、入れると答えた。しばらくしてミルクが程よく入ったコーヒーを渡してくれた。彼らとカタコトの英語で会話しながら温かくほのかに甘いコーヒーを流し込むと、自分の中で何かが溶けた気がした。「勇気のコーヒー」を飲んだ私は、その日の目標を楽々達成した。勇気が必要なときは未だにあのコーヒーを思い出している。